

“津久井観音霊場巡り” その1

1日目 (H19, 2007/06/12 火) 歩き

自宅 (am11:38 出発) →7.34km→第1番; 雲居寺→1.7km→第2番; 三明院→2.98km→第3番; 中野堂 3.04km→第4番; 湘南寺→2.29km→第5番; 久保沢観音堂→2.14km→第6番; 宝泉寺→1.28km→帰宅 (pm16:21 着) 合計 20.77km

発心

津久井地方にも三十三観音霊場があることは、散歩の途中などで時々見かけたので知っていたが、この広い津久井地域にどのくらいに散らばっているのか気になっていた。

NHKで四国霊場の巡礼番組を見たときに、地元の津久井三十三観音霊場のことを知りたいと調べているうちに、相模湖の正覚寺の住職が詳しい情報を発信していることにたどりついた。

津久井三十三観音霊場は、三十三ヶ寺のほかに番外霊場があったが、現在では正式な追加霊場として四十三霊場として存在することが分かった。12年毎の本開帳(午歳)、間の6年目の来年、平成20年の子歳が中開帳に当たるようである。

看板などは未だに「津久井三十三観音霊場」のままであるが、正式には「津久井観音霊場」として開設されている。この一つひとつの霊場を、順打ちで巡ってみたいと思ったのが最初であり、これまでの苦しみ喜びをみつめながら自由な服装で無理なく巡り、般若心経を読経したいというのが発心である。

津久井観音霊場の由来 (正覚寺のHPより引用)

津久井三十三所観音霊場は、今から凡そ二百五十年程前の宝暦年間に、津久井町根小屋寺沢にある禅宗の臨済宗建長寺派雲居寺の大雲禅無和尚(越後魚沼の人、後に建長寺住山二百二世と成り、天明三年十一月五日示寂)が、津久井郡内一円に亘り宗旨宗派を問はず、観音様を祠る寺院に呼び掛けて、雲居寺を第一番に、そして郡内を一巡して隣村の長竹、来迎寺を第三十三番として打ち納めとする津久井三十三ヶ所観音霊場を開設した事に始まります。

津久井三十三所観音霊場の始まりは、平安時代の観音信仰に基づく、観音大士三十三応身に因んだ西国三十三所観音霊場が本源ですが、西国三十三所観音霊場への巡礼は、遠国故に時間とお金や、余裕のある特定身分の人に限られておりました。そこで、西国への巡礼をしなくても、誰でも一般庶民が、容易に観音霊場参りが出来る様に、江戸時代になり関東一円に開設されたのが秩父、坂東、津久井等の三十三所観音霊場であるといわれます。

1日目

絶好の日和の中を、いつものウォーキングルート塔王権現坂から出発し、津久井街道413号線を西に向かう。

この夏が心配なほど、湖面が下がった津久井湖を眺めながら城山ダムを渡っていると、企業庁の建物の下に何やら水門らしきレンガ造りのものが顔を出しているのが見える。(写真の矢印部)

取水塔に黄色と青色の線が見えるが、黄色は満水位(海拔214m)、青が通常水位なので、もうすぐ水がなくなりそう。今年本当に大丈夫なのだろうか？



数日前の散歩中に撮影したものを拡大してみると、右から**川尻隧道**とプレートがはっきり読める。(右の写真)

多分日本最初の水道、横浜水道の隧道跡だと思われた。今は、城山ダムを鉄管で横断している隧道の名残なのだろう。普段は水没している明治 20 年完成の第 3 工区の遺産に想いをはせながら“花の苑池”を通り抜け、赤十字病院前（旧：日本赤十字病院）を旧道に進む。今でも“日赤病院”とみんなが呼んでいるが、実は“津久井赤十字病院”が正式名称なのだ。おかしいことに神奈中のバス停も未だに“日赤病院前”で運行している。こういう名称を変えるのは容易ではないのかもしれないが、病院名が改称になったのは驚くなかれ昭和 40 年のこと。もう 40 年以上も前のことなのだ。いくら何でもと感ずるのは、今まで縁がなかった自分だけかも知れないが・・・。



津久井警察署の少し手前を、左に折れて 513 号線に入ると、緩やかな登り坂がしばらく続く。坂道の途中から津久井湖の眺めをパノラマ撮影する。坂を上りきった先に第 1 番札所の雲居寺（うんごじ）が見えてきた。

津久井観音霊場はじめての札所：雲居寺の境内は、見事に手入れされており、静かな本堂に向かうと身が引き締まる。般若心経をはじめて読経し、時刻や距離などを記録して次の札所に向かう。



“ご詠歌”
五・七・五・七・七の和歌（三十一：みそひと文字）に節をつけたもの。

“補陀落”とは、観世音菩薩が住んでいるとされる山のこと。

補陀落や峰に雲居の
空晴れて真如の月を
拝む寺沢
ふだらくやみねにくもいの
そらはれてしんによのつきを
おがむてらさわ

第一番 雲居寺（寺沢） 十一面観世音菩薩
十一面観世音菩薩 津久井町根小屋 2339（寺沢）興徳山雲居寺（うんごうじ）。**臨済宗建長寺派**。

本尊は地藏菩薩、鎌溪是尊禪師の開山。鎌倉建長寺十刹の一つで光明寺と同様、建長寺の中本寺末。当山 21 世（鎌倉建長寺 202 世）大雲禪無和尚が、江戸中期の安永年間（1772～1780）津久井三十三所観音霊場を唱導し、霊場第一番札所とす。堂宇は明治 15 年焼失、現在は新本堂の建立が成る。4 月 24 日の施餓鬼は有名。三疊敷の貴重な涅槃絵図もある。

ここから 2 番札所の“三明院”は近いはずなのに、予定の道のりになぜか見つからず、通り過ぎてしまい 5, 6 百メートル戻ってようやくそれらしきを見つけた。お寺というには程遠く、全くの普通の民家に見える。廃寺となり在家でお祀りしてあるとの予備知識だったので、多分間違いない。それにしても近寄り難い構えの所だった

第 2 番 三明院（土沢） 聖観世音菩薩
大聖山三明院（さんみょういん）。**真言系**。寛文 5 年（1665）法印大内昇昇の開基。明治元年神仏分離令に依り、稻生集落の春日神社境内にあった春日堂を現在の長竹大内正和宅へ遷座した。又、第 32 番札所の光明寺とは縁が深く、江戸後期から明治にかけて活躍された光明寺世代の大内寿翁和尚（1835～1904）は、この札所代表大内家の家系から出生し、出家している。

ので、読経せずに写真だけを遠くから撮ることにした。1 番札所が立派だったので、この落差にはがっくりさせられる。ここを探し出すのに相当に時間をロスしたのですぐに次を目指すことにする。

春の日は三つの社に
輝きて高き臺も
深き千尋も
はるのひはみつのやしろに
かがやきてたかきうてなも
ふかきちひろも



3 番札所の“中野堂”は、県道からすぐ下の集会所に遷座されており、すぐに見つかった。お札などはすぐ傍の石井鉄工所にて取り扱っている旨の張り紙もあり、地域の人たちが丁寧に祀っている様子が伝わる。理解しやすいご詠歌も掲げられており静かに読経して後にした。

第3番 中野堂（中野） 十一面観世音菩薩
清水山中野堂（なかのどう）又は、古は金原山化現坊（けげんぼう）。**在家札所**。元禄 15 年（1702）戊午に金原山賢太郎坊内に霊場本尊を勧請する。明治 39 年 9 月 5 日に根小屋 1072 番地に移され、清水山中野堂に改称、根小屋地区、中野集落の守護仏として安置されていた。その後、昭和 46 年南 根小屋集会所が新築され集会所内に遷座した。霊場巡礼納経等の取り扱いは、南根小屋集会所で取り行なわれる。



エアコンの左が祠である。

化現して導き給え
観世音娑婆と冥途の
中の懸け橋
けげんしてみちびきたまえ
かんぜおんしゃばとめいどの
なかのかけはし

4 番札所の“湘南寺”は、城山町の歴史講座で一緒に御坊のお寺であり、そのとき本堂の内部を見学させてもらったことがある。小倉の宮原地区からは尾崎坂を下り、近道をしてこの札所に到着した。この境内で弁当を広げたこと、立派な冊子を頂きながら、ほんの小銭しか持ち合わせがなかったことなどを懐かしく思い出しながら読経する。



有難や岸打つ波も
法の声石浜堂に
響く川っ瀬
ありがたやきしうつなみも
のりのこえいしはまどうに
ひびくかわっせ

第4番 湘南寺（小倉）

十一面観世音菩薩

小倉山湘南寺(しょうなんじ)。臨済宗建長寺派。本尊は薬師如来。創立当初は医王山東光寺(極楽山西光寺の隠居寺)と称し、創立年月不詳。明治44年普春山常照寺と合併、春王山東照寺と改寺。更に昭和25年西光寺を合併、村名を取り、湘南寺と寺号を改め、山号は小倉山と称し現在に至る。本尊安置の石浜堂は当初串川の岸壁にあったが、明治になって廃堂と成り、霊場本尊は当寺本堂に安置された。

来た道を尾崎坂の下まで引き返し、旧小倉橋を急いで渡り、次の札所に向かう。
車に足を轢かれたご難の場所から、急坂の歩道を駆け上る。小倉橋からの登り坂はかなりきついダラダラ坂だが、普段から歩きなれているせいか、さほど気にならずに登り切る。途中、道路を横断する石造りの水道橋が二つあるのが気になって仕方なかった(鉄の水道管は、一番下の作業橋のところにも有る)。坂上の水道橋の方が、年代的に新しいように見えたが、二つとも横浜への水道路なのだろうか？ ひょっとすると、この水道橋が、津久井湖に水没し封鎖された“川尻隧道”の下流なのかもしれないなあ、などと考えながら歩く・・・。

5 番札所の“久保沢観音堂”は、日ごろから通りかかっている所なので霊場めぐりには不思議な感じがする。小倉の方から近づいていくと、広瀬病院のずーと下の方からでも観音堂の階段が真正面の視界に入ってくる。

曇りなき月の桂の
昌寺御影新に
照らす久保沢
くもりなきつきのかつらの
さかえでらみかげあらたに
てらすくぼさわ



第5番 久保沢観音堂（久保沢）

聖観世音菩薩

当観音堂は、元臨済宗建長寺派の桂昌寺持ちで、久保沢の宿を見下ろす小高い所に位置する。堂内境内には御本尊の他に百体観音の石像を安置してある。桂昌寺は明治39年類焼、大正元年林泉寺に合併し大正寺と寺号を改める。桂昌寺、林泉寺の開山は同じで春林甫禅師であるが、創立年月は共に不詳。大正寺は山号萬壽山、本尊は薬師如来。兼務は城山町谷ヶ原134 臨済宗建長寺派大正寺

昔、このあたりには“六斎市”が開かれていたので、人々が小倉から登ってくると、真っ先にこの観音堂が目に入ったのだろうなあと思われた。昔は温泉坂が正規の道路だったようなので、県道が広瀬病院の所で右に曲がるように掘割が掘られたのは、かなり後になってのことだと思う。観音堂で読経し、お祈りしている人々の苦勞に想いをはせながら、本日最後の札所に向かう。

久保沢と原宿の市は、津久井町の中野に市が立つようになると衰えたようだが、久保沢は3、13、23、原宿は6、17、27の日の月6日、市が開かれ“六斎市”とよばれ賑わった。久保沢の清水あたりまでの両側に31軒の家並みがあったというから立派な商業地だった。観音堂はこれらの人々に守られたお堂だったのだろう。観音堂の左脇には久保沢市守神社が祀られている。(詳しくは、Webの屋根のない博物館へ)

本日、予定最後の6番札所“宝泉寺”は、小松城址に隣接している寺である。丁度本堂の建替え工事中であったが、輪郭は既に完成しており、一応お参りをすることはできた。



第6番 宝泉寺（小松） 十一面観世音菩薩
松風山宝泉寺（ほうせんじ）。**高野山真言宗**。本尊は釈迦如来。久安4年（1148）示寂の宥正上人の開山と云われる。霊場本尊十一面観世音菩薩は行基菩薩の作と伝えられる。寺にある石灯籠と板碑2基は町指定の重要文化財。境内は小松城址と成っている。宝泉寺城とも云はれ、長井大膳太夫広秀云う武将の築城で、その菩提寺であつたらしい。

小松城址に食い込むように造成されている本堂が、完成した頃にもう一度お参りに訪れようと思ったが、明るい檜造りの本堂には、霊場の空気よりも、現代的なお寺の雰囲気が出てしまうだろうなあと感じられた。それはそれで仕方ないことだけれど……。観音堂も建立されるのだろうか？

潔き小松の風も
法の声心も清く
澄める宝泉
いざよよきまつのかぜも
のりのこえこころもきよく
すめるほうせん

➤ の津久井三十三観音霊場巡りで、同じ歩くでも何時ものウォーキングとはまた違う感覚があった。
➤ 縁あって津久井郡に住みつきながらも、初めて訪れる感動や、こんなに近くで気づかされたりする喜び、札所から札所へと景色や移ろいを眺めながら、いつの間にか自分をもみつめて歩いているのは、ウォーキングの感覚とはまた違うものが残るからなのだろう。
昔の霊場巡礼では、野宿やお布施を受けながら20キロ以上の荷物を背負って、この距離以上を歩くのだから、比べものにならないのだろうが、江戸中期の宝暦年間に開かれた津久井観音霊場に、幾多の人々が苦難を背負いながら歩いたのであろう道は、今では殆どが舗装路になってしまっている。
それでも“南無大師遍照金剛”と庶民が同行二人で踏みしめた歩数だけは、今の自分と変わらないものだっただろう。諸行無常の中に生かされていることに感謝しつつ、43ヶ寺満願までみつめ続けてみたいものである。

（津久井観音霊場巡りーその1 終わり）